

no.24

CLCからしだね書店便り



12 2022
December

CLCからしだね書店では…

- 1 キリスト教書が中心ですが、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- 2 お洒落 でかわいい 雑貨や小物もあります。
- 3 ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- 4 コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- 5 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- 6 古書のコーナーもあります。ほりだしものもあります。
- 7 読書会や著者を招いての講演会など、人と人との出会い、つながる「対話」の場を提供します。

『悪について』
『ヒューマニズム考』

エーリッヒ・フロム(ちくま学芸文庫)

渡辺一夫(講談社文芸文庫)



1 自由という重荷

前編では、「なぜ人間は意見や立場が異なるというだけで他人に対してそれほど残酷になれるのか?」「人間の本质は善なのか?悪なのか?」という問いに対して、エーリッヒ・フロムが『悪について』のなかで、どのように述べているを紹介しました。そして、人間は「人間であることの重荷」を背負って自らの生き方を決めていくしかないと述べていることも紹介しました。しかし、すべての人間が常に自由にその選択を行っているわけではありません。というのも、人間は誤った選択をするたびに、良いものを選択する能力を失っていくからです。

私たちの選択能力は、生活をおくるなかで絶えず変化する。誤った選択を長く続けるほど、私たちの心は硬化する。正しい選択をすることが多ければ、心は柔軟になる。――いや、おそらく生き生きとする。(『悪について』188頁)

ここでフロムが「誤った選択」「正しい選択」という表現を使っていることには理由があります。フロムによると、人間の本质

フロムにとって、自由とは選択の可能性を言うものではありません。そうではなく、何に服従しているかが問題になるのです。服従という言葉は一見自由とは正反対に思えるかもしれませんが、フロムによると、自分の理性や価値観に服従することは、人間の心を柔軟にし、さまざまな可能性に開かれた意識を自覚させます。反対に恐れや不安に基づいて行動すると、もの見方まで恐れや不安に支配されて狭まってしまう。理性・信念・価値観に従って行動することで自由な人間になっていくか、自由を放棄することで「人間であることの重荷」から逃れ、恐怖や不安に支配されるか。人間は常にこの岐路に立っていると云えます。

2 ナルシシズムと暴力

フロムにとって、悪の問題は、以上のような人間の置かれた状況と密接にかかわっています。というのも、悪とは「人間であることの重荷」から逃れる一つの方法、解決を求める孤独感や不安に対する一つの回答だからです。

フロムは「解決方法としての悪」の持つ性質の一つとして、「ナルシシズム」を挙げます。人は無力感や恐怖から逃れるために、外界との接触を断ち、自己の内部で完結した世界を作り上げるという道をとることがあります。自己の内部の想像の世界に住むことで、思い通りにならない現実の世界に脅かされずに生き

的な自由を考えるとときに問題になるのは、「晩ごはんは何を食べるかを自由に決められる」といった種類の、複数の良いものから好みに従って選択する自由ではなく、悪いものに対してより良いものを選ぶことができる自由、非合理的な恐怖や情念ではなく理性や価値観にしたがって行動できる自由なのです。そして「正しい選択」をすれば、次に「正しい選択」をするのは一層容易になり、「誤った選択」をすれば、次に「正しい選択」をするのは一層困難になるでしょう。正しい行為を続けた結果、「正しい選択」しかできなくなった人こそ、「完全に自由な人」なのです。

この過程で私たちがどのくらい選択できるかは、それぞれの行為、生活習慣によって変わる。人生において自己の信念、尊敬、勇気、確信を高めるそれぞれの段階は、望ましい選択を選ぶ能力も高め、やがて望ましくない行為を選ぶ方が難しくなる。反対に屈従と臆病に基づく行為は自分を弱体化させ、さらに屈服の行為への道を開き、やがては自由を奪われてしまう。(同189頁)



ることができなくなるからです。ナルシシズムは、自信ではなく、むしろ自己不信や恐怖を原動力とするものなのです。

ナルシシズムの例として、フロムは「ナルシシスティックな男の恋」を挙げています。

ナルシシスティックな男はその女性が自分を愛していないことを信じようとしない。男の理屈はこうだ。「自分がこれほど愛しているのに、彼女が自分を愛さないことはありえない」、あるいは「彼女が愛してくれないなら、自分もこれほど愛せるわけがない」。そして女性がなびかないことを、次のような理屈で正当化する。「彼女は無意識で僕を愛している。自分の愛の激しさを恐れている。彼女は僕を試し、苦しめようとしている」など。ここでの基本的なポイントは、(中略)ナルシシスティックな人間は、他の人の現実が自分の現実とは違うことを認識できないということである。(同88頁)

男は、女性が自分を愛していないという現実から逃れるために、「本当は彼女は自分を愛している」という想像の世界を作り上げ、現実の側を無理に想像の世界に合わせようと行動します。そしてその行動が、「他の人の現実」を破壊することへとつながっていくのです。

以上は個人のナルシシズムの例ですが、フロムによると社会全体がナルシシズムの様相を帯びることもあります。個人の場合と同じく、社会的ナルシシズムも不安や恐怖から発生するものです。そして社会のナルシシズムこそ、「愛国主義、民族憎悪、そして破壊や戦争の心理的動因」（同79頁）を理解するうえで重要なのです。

成員の多く（あるいは大部分）が満足できるだけのものを供給する手段のない社会において、その不満を取り除きたければ、その成員に悪性のタイプのナルシシスティックな満足を与えるしかなくなる。経済的、文化的に貧しい人々にとっては、その集団に属しているというナルシシスティックなプライドだけが満足の源となる（それは非常に効果的なことが多い）。人生に“面白い”ことがなく、興味が生じる可能性がないからこそ、極端な私たちのナルシシズムが発達するのかもしれない。この現象の最近の好例が、ヒトラー時代のドイツに存在した人種のナルシシズムであり、これはこんにちのアメリカ南部にも見られる。（中略）経済的、文化的に恵まれず、状況を変えるような現実的な望みも持たず、満足をもたらしてくるものはない。それは、自分たちは世界でもっとも賞賛されるべき集団であり、劣等とされた別の民族集団より優劣であるという肥大化した自己イメージである。（同104―105頁）

私たちの教義への批判はなんであれすべて悪であり、耐えがたい攻撃である。他の立場への批判は、彼らを実実に引き戻すための、善意による試みなのだ。（同109頁）

集団的ナルシシズムは、自己の絶対性を主張する宗教においてこそ最もよく見られるものかもしれません。たとえばオウム真理教の暴走も、「肥大化した集団的ナルシシズムの妄想と現実との乖離を一举に埋め合わせるための行動」という図式で説明すると理解しやすいのではないのでしょうか。選挙での大敗という現実と直面した麻原彰晃が、傷つけられたナルシシズムを修復するために、「ハルマゲドンに近い、しかしオウムの人間は救われる」という、さらに現実離れた妄想的自己イメージを作り上げ、それを実現するために、みずから「ハルマゲドン」を引き起こした。フロムがオウム真理教を分析するとしたらこのようになるのでしょうか。

フロムによると、ナルシシズムの中でも悪性のものは、現実からのフィードバックによって自己変革する可能性がないという特徴があります。

偉大さを維持するために、どんどん現実から自分を分離していく。そしてナルシシスティックに肥大化した

こうしたナルシシスティックな集団的自己イメージを守るためには、ある程度の現実的な裏付けが必要になりますが、いったん集団の外に出ると、こうした自己イメージが通用することはありません。自分の属する集団は数ある集団のなかの一つにすぎず、それぞれの集団がナルシシスティックな自己イメージを持っているからです。そこでナルシシズムを満足させるために、ナルシシスティックな想像の世界を現実とするための暴力が生じるというわけです。ホロコーストは、ナルシシスティックな自己防衛欲求が極端な形であられたものと言えるでしょう。

フロムはこうした集団的ナルシシズムによる暴力が、宗教集団間において生じた例として、16、17世紀ヨーロッパの宗教戦争を挙げます。

どちらの側も神やキリストや愛の名のもとに語り、違いは一般原則から見れば二次的な重要性しかないことばかりだった。しかし彼らは互いに憎み合い、どちらも自分たちの信仰の外にヒューマニティはないと信じ込んでいた。この自分たちの立場への過大評価と、違うものをすべて憎むことの本質こそ、ナルシシズムである。「われわれは賞賛に値する」「彼ら」は軽蔑すべき存在だ。「われわれ」は善で、「彼ら」は悪だ。自分

エゴが空虚な妄想の産物だと暴露される危険から身を守るため、ナルシシズムをさらに高めていかななくてはならない。そのため悪性のナルシシズムは自己制御できず、結果的に、露骨に自己中心的なばかりでなく、他者を嫌うようになる。（同102頁）



ナチスドイツや日本ファシズムが孤立していく様、またオウム真理教やその他の宗教団体がカルト化・反社会化していく様にピッタリ当てはまる説明です。これらの集団的ナルシシズムがいかに「悪性」だったかがよく分かります。そしてナルシシスティックな妄想を防壁として現実を無視し続けても、いつか必ず現実からしつぱ返しを食わされるといっても、これらの集団の破滅に向かう様を見ると分かります。

もし核兵器を持った巨大な国が、集団的ナルシシズムという妄想にとり憑かれて、その妄想を現実化するために最悪の決断をしたら…。そのときには寒々とした「現実」が厳然と姿を現すでしょう。『悪について』が出版される2年前にキューバ危機が起こっています。フロムは人類的な危機を前に、人間の悪とその根源を分析することが必要だと考えたのです。

【書店員G】





今月号を持って、武山が担当していた「からしだね館のひとこま(途中からメダデ教会のひとこま)」を区切りとさせて頂くことになりました。2年間、このような機会を与えていただいたことを感謝しています。10月の「二人の安倍さんのお葬式」の記事から、3か月連続で、大阪西成のメダデ教会のことを書いています。メダデ教会の礼拝で、いろんなことを感じ、考えさせられ、すごい事実に気づきました。今回もメダデ教会の「愛をばらまけ」からみなさんにシェアしたいと思います。

メダデ教会について

西成のメダデ教会の信徒たちは、いろんな問題を抱え、西成に流れ着き、そこで日銭を稼ぎ、犯罪に手を染め、家族や知人とのつながりが途絶えた人たちだ。「人間のくず」と言われても、抵抗さえすることもできない、自分でも「人間のくず」とあきらめているような人たちだった。

「西成のおっさんの顔をあげさせたい。人間のくずを立ち上げさせたい」その使命に突き進む西田好子牧師が、そんな一人一人をメダデ教会の家族として迎え入れた。「メダデの子」信じていた。西田牧師がボロボロのモト氏を、旧あいらん労働福祉センターで野宿者におにぎり配っていたときに見つけた。「うちの子にならへんか」と声をかけたら、素直についてきたそうだった。

生活全般を支える西田牧師を「ママ ママ」と呼び、そばを離れようとしなかった。

加齢とともに、さまざまな病気が彼の体を蝕んだ。今年の秋口には入院となり、口からの食事がとれなくなった。痰が自力で排出できなくなり、喀痰吸引が必要になった。

メダデの家族に帰りたいという彼の思いと、家族のもとに戻してやりたい西田牧師の強い思いが彼を支えた。メダデ教会のみなが、モト氏の退院を祈りに祈った。そして、ようやく、12月に入って退院することができた。

普通の車いすではなく、ストレッチャータイプの車いすに乗ってモト氏が日曜礼拝に来た。車いすに半分寝かせた状態で会堂の一番前で礼拝に参加した。礼拝の途中に訪問看護師がやってきて、胃ろうを注入し始めた。そして、ガガガーと音を鳴らしながら吸引機で痰を吸い取って、看護師は去って行った。

礼拝はそんな状況でも、普段通りに進められていた。モト氏は、礼拝の間、しっかり目を開き、歌詞や聖書のことばが映し出されるスクリーンを凝視していた。遠くなった耳でどこまで賛美やメッセージが聞こえているのかはわからない。しかし、はた目から見ても、はっきりとした意思を持って礼拝に参加していた。

徒)は私が西成の公園で拾ってきてん」愛おしそうに西田牧師はそんな風に一人一人の信徒のことを紹介する。

住居を整え、病院でボロボロの体とこころの治療を受けさせ、役所とかけあって生活保護を申請し、保護費の範囲で生活ができるよう、金銭管理をする。たばこやお酒、薬物、ギャンブルは徹底して禁止している。離脱症状に苦しむ彼らを西田牧師は絶対一人にしない。

何よりも、神の愛を知り、それを日々の暮らしで実践することを、彼らに叩き込んでいる。何十年の間、不安定の極みの生活をしてきた彼らが、西田牧師を通して神の愛を知り、酒やギャンブル、薬物から離れた生活を実践している。そんな彼らを見ていると、神の愛は現実の問題の中にあり、不条理や絶望の意味合いを変えるものであると教えられる。

メダデ教会の礼拝のひとこま

先日の礼拝では、退院したモト氏が久々に出席していた。

モト氏は80代の男性。知的に障害があり、人生の大半を西成で過ごした。空き缶を拾いながらその日暮らし。住む場所もなく、生活保護を受給しても、なぜか路上での生活を続け

メッセージをしていた西田牧師が突然、講壇からモト氏に言った。「モト、みことは、読んでみい」モト氏は、声を出そうと表情を変え、何とかみ言葉を讀もうとした。しかし、声にならない。モト氏が頑張れば頑張るほど痰がからまる。

「モト、頑張れ、読め！頑張れ！読んでみい」西田牧師はそれでもみ言葉を讀ませ続けた。メダデの全員がモト氏の痰の絡んだ息使いに集中した。そして誰かが言った。「モトさん、頑張れ！」それがきっかけになり、「モトさん 頑張れ！」「モトさん！」「モトさんー」

西田牧師が言った。「モト、返事せいー」「モト、はいー」つて言え！」するとモト氏が「はいー」とはっきりした声で返事をした。皆が立ち上がった拍手をした。モト氏もくしゃくしゃの笑顔だった。

そして、西田牧師が講壇からモト氏のもとに移動し、吸引を始めた。「痰がからんぞる、取ったるからな」喀痰吸引機を使って、家族と専門職だけが許されている痰の吸引を始めた。(ちなみに、この喀痰吸引は医療行為のため、医療や福祉の研修を受けた者以外の第3者は吸引することができない)「コー コー ガガガガー」モト氏の唾液と痰が吸い込まれていく音が礼拝中の会堂に響きわたった。吸引を終えた西田牧師は講壇に戻り、メッセージを再開した。

一部始終をそばで見ながら思った。

礼拝は、生活だ。

礼拝は、命の営みの場だ。

礼拝は喀痰吸引の場であり、胃ろうの場でもある。

礼拝は生活で、礼拝は命の営みの場なんだ。

メダデ教会の「生産性」について

メダデの信徒たちは、ほとんどの人たちが病気や障害を持っている。認知症で生活全般に支援が必要な人、体が動かず、トイレや入浴の介助が必要な人、糖尿や心臓病などで体調や服薬管理が必要な人、精神疾患のため、そううつ波が激しかったり、対人関係でサポートが必要な人、理解力・判断力の課題で、一人での受診ができず、必ず付き添いが必要な人、移動では車いす介助が必要な人…

そんな病気や障害だらけの彼らはマンションパブリックという、風呂・トイレ共同のワンルームマンションに住み、家族のようにお互い支えあって暮らしている。

動ける人が動けない人の世話をする。動けない人が、認知症の問題のある人の見守りをする。信徒たちは食事や買い物など、日々の生活を共にすることで、アルコールや薬物依存の人の様子を確認できるようにする。わずかな生活費を大切に使うため、西田牧師がお金の管理をする。西田牧師が受診にどうしても付き添えない場合は、別の信徒が付き添う。

西田牧師が誇らしげに私に説明してくれた。

「この子はおかまや。ほんで発達障害あるねん。よそで仕事はできひんねん。せやけどな、気持ちがいい子で、他の子の面倒、ものすごいよう見てくれるねん。この子は社会では使えもんにならんけどな、家族の面倒はだれよりも丁寧に見れるねん」

「このおっさんはな、認知入って糖尿やけどな、車いす押したり、荷物運んだり、自分の仕事やと思て何でもしよるねん。」

ない人が大半だ。だから西成にきたのだ。

働く意思があっても社会の受け皿がなく、働くことができない彼らは、弱さを持つ教会の家族をケアすることで、役割が与えられる。目の前の人は、自分がケアしないと生活が滞ってしまう…自分の役割、自分が必要とされている…この感覚は生きていく上で私たちを支えるものである。

家族との関係が途切れてしまった彼らは、家族として、弱さを持つ人たちをケアする。

ケアすることにより一層家族になっていく。その積み重ねの中で愛を知り、ますます愛の実践が積み上げられる。

これが「生産性」と言わずに何と言おうか。社会で働いている私は、果たしてこれほどのものを生産しているのだろうか。

自分のできること、目の前の人をケアする。できないことは目の前の人にケアされる。

ケアされながらケアをする。これはすぐれた「生産性」の高い営みだ。そして、福祉や医療に使われる税金が、確実にセーブされる。少子高齢化社会にあつての、サバイバル方法なのではないかとも思う。

西田牧師は「この子らは人間のくずやない」と必死になって彼らに神の愛を伝えた。「神に愛されたんやったら、目の前の兄弟をなんで愛せへんのやー」と言い続けた。「なんで、もっと愛せへんのやー!なんでもっと愛せへんのやーもっと愛せー」メダデ教会では、その愛が、礼拝に、生活に、しっかりと根付いている。その愛はたくさんを生み出している。

もし、彼らが、私からしただねで支援している対象者だったらどうなるだろう。障害のある人たちの生活をサポートしている私は、果たして彼らにどんなサービスを調整するのだろうか。電卓をはじいてみた。

①介護が必要な車いすの人(8人くらい)の支援

・家事や入浴・トイレ介助などの支援

身体介護30分・家事援助30分を週3日↓月48万円

・受診の同行支援

週1回 1回2〜3時間↓月36万円

②車いす以外の人の支援(10人くらい)

・受診同行 月1回 1回2〜3時間↓月9万円

注) 大阪市の福祉サービス地域区分 2級地(109)で試算
本当に荒っぽい計算だが…

93万円近くが税金から福祉サービス利用料として毎月支払われることになる。西田牧師がほぼ全員にしている金銭管理を福祉サービスとして加えたら、月額100万円以上になる。

実際は、モト氏のように、一日複数回の体位交換、排泄介助などが必要な場合は、もっともっと福祉サービスの利用料が支払われることになる。それがメダデ教会の場合はほとんど不要なのだ。金額だけの問題ではない。

メダデの信徒たちは、ほとんどが50歳以上だ。きちんとした就業経験のない彼らは、年齢的にも雇用されることは難しい。義務教育をあまり受けていない彼らの中には、読み書きが難しい人もいる。犯罪歴のある人も少なくない。病気や障害ゆえに、仕事を覚えられなかったり、他の人とコミュニケーションをうまく取れ

冒頭ですごい事実に気づいたと話したのは、この「生産性」のことだ。

生産性のない「人間のくず」と呼ばれた人たちが、どれだけこの社会の中で「生産性」の高い営みをしているのか。それを数字で確認した時、その額に震え、興奮した。

メダデ教会の実践によって明確になったこの「生産性」私は人を「生産性」で語ることは好きではない。しかしそれを数字で言わなければ、何となくの感情論で流れてしまうのが事実だ。だからあえて数字で書いてみた。数字によって、もし、少しでも多くの人に一緒に考えてもらえればとの願いをこめて。この「社会のくず」と呼ばれてきた人たちの素晴らしい価値を、声を大にして訴えていきたい。財政的に非常に厳しい私たちの社会が、私たちの未来が、メダデ教会の「生産性」を知ること、何か少しでも希望の方向に変わるのではと期待してやまない。

福祉の現場とメダデ教会に身を置きながら、痛みや弱さから、未来に希望をつくりだすことを考え実践するものがありたい。2年間にわたり、書店ばかりでお付き合いただいた皆さまに、このように感謝しています。



障害のこと、福祉のことについて「こんなことを聞いてみたい」などのご要望があれば、ぜひ「ここからしただね書局(cic@karashidane.or.jp)」までお知らせください。





京都のかたすみから見えた風景(7)

LoCoからしだね書店 店長 坂岡 恵

「特別な贈り物」

クリスマスシーズンの書店は、大忙しです。カードやプレゼント、絵本の注文がたくさん入ります。自分のためではなく、誰かを喜ばせるための買い物ですから、皆さんとても楽しそう、そして幸せそうです。クリスマスにプレゼントを贈り合う、なんて素敵な習慣でしょうか。

今から20年以上前のクリスマスの朝。小学校一年生だった長男が、「お母さん、たいへんや！サンタクロースを見た！」と大興奮でキッチンに飛び込んできました。

「サンタさんはな、透明やったで！サンタさんはな、透けて見えるんやで！」

彼の手には、包装紙からむき出しにされたポケモンソフトがしっかりと握りしめられていましたが、それよりなにより、「サンタさんを見た」というなんとも不思議な出来事の方が百倍うれしかったらしく、あとから起きてきた妹や弟に、「透明のサンタさんがいかにすごい人だったかを自慢げに語り始めました。そして、妹と弟は「いいなあ、見たかったなあ」と、しきり

に兄のことをつらやましがりました。

長男によると、なにか気配を感じて目をさますと、部屋に透明のサンタさんがいて、ゆっくりとした動作でプレゼントを枕元に置き、壁をすり抜けて出て行ったというのです。「うち、煙突ないしなあ」と私が言うつ、「サンタさんは子どもの味方やから、どんな家でも、かんちこちんに入れるんやで」と彼はたいへん得意げです。

大人になった長男は今、透明なサンタさんのことをきわめて現実的に解釈していることでしょう。それでも、サンタさんを見た瞬間の胸の高鳴り、たとえようのない喜びや驚きは、確かな体験として心に何度もよみがえってくると思うのです。それは神様からの特別なプレゼントだったと思います。

子どもには、そんなスペシャルプレゼントを受け取ることができる才能が備わっているのかもしれない。

子どもの味方のサンタさんが、どんなに厳しい状況の家の子にも、そっと姿を見せてくれますように。凍えるような寒空の下でも、子どもたちにひとときの平和が訪れますように。

「おまかせ」

カタログが書店に入荷する時期の関係で、カタログをお届けする時期が遅くなり、大変申し訳ありません。

「おまかせ」

◎オリーブスの2023年の手帳(プランナーとダイアリー)については、今年もまた早くから品切れ状態になってしまいました。教会様には、これから暑くなるという6月にお申込みの予約ちらしを入れていたのですが、まだそんな気分にもなれず、スルーしてしまっただけという方もありました。また、個人のお客様にまでご予約の通知ができていません。おそらく、来年も基本デザインのパターンは変わらないと思いますので、もし可能でしたら、今からでも、「来年の手帳、このデザインのもの、予約しておきます」とFAXかメールで一報いただけると、ありがたいです。確実にお手元にお届けできると思います。

「おまかせ」

◎オリーブスの「壁掛けカレンダー 墨彩画カレンダー 華のしちべ」クリスマスBOXカード19枚入り」も、毎年、あつという間に品切れになってしまっています。「よい、どん！」くらいの勢いで品切れになります。

「おまかせ」

◎来年は、今年の教訓も含めて、なるべくお客様の必要なものを、必要な数だけお届けできるように、工夫をしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

「おまかせ」

◎書店だよりと一緒に、法人(社会福祉法人ミッシェンからしだね)が発行しているからしだね通信も、出来あがりしました。「マイクログレッシュョン」を特集しています。書店に置いてあります。

「おまかせ」

◎ノートルダム教育修道女会シスターアスタ福島様のチャリティカレンダー「みことばカレンダー(税込み1000円)」は、今年もからしだね書店で販売しております。収益金は、海外の被災地支援のために寄付されます。

「おまかせ」

◎「からしだね館のひとこま(武山世里子)」「京都のかたすみから見えた風景(店長)」は、いったん終了します。が、突然、臨時で記事を出す可能性大ですので、楽しみにしておられた方は、お見逃しなく。どうぞよろしくお願いいたします。



古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。(受付できないものもありますので事前にお知らせください)

百科事典・辞書・開封済みの
CD・DVD・月刊誌・週刊誌等は
受け付けておりません

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本(多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし(料理、健康、経済等)にかかわる本
- 5 小説(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

北村修一様、飯田悦子様、桐山起世子様、佐竹紀美子様、前田ケイ様、斉藤和子様、佐野弘子様、匿名様
(順不同)

11月の古書の収益は57,964円でした。【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆今年も1年が終わろうとしています。いろいろお世話になりました。たくさんのご協力をいただきました。書店のミスやいたらなさも含めて、あたたかくお付き合いくださった皆様に、心より感謝いたします。◆いのちのこぼ社が毎月発行している「いのちのこぼ」に、からしだね書店店長が1年間の連載をすることになりました。書店の裏事情も含めて、京都とその周辺のお客様、教会との出会いの中で感じたことなども書く予定です。「あれ？これもしかしたら私のこと？」と思われた方、「そうです、それはあなたのことです」◆寒くなりました。今年もまた、コロナとともに迎えるクリスマスとお正月です。どうぞご自愛ください。皆様の上に神様の豊かな祝福をお祈りいたします。【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの
バックナンバーはこちらから

